

2019年11月2日

講演者：Tania Zittoun (ヌーシャテル大学)

司会者：木戸彩恵 (関西大学)

解説：サトウタツヤ (立命館大学)

通訳：小松孝至 (大阪教育大学)

## ライフコースにおけるイマジネーション：社会文化的心理学の視点から

### Imagination in the lifecourse: A sociocultural psychology perspective

#### 1. イントロダクション

みなさんこんにちは。こちらに今日来ることができて大変名誉に思っております。まず最初に、日本発達心理学会に、私を日本に招聘して、このようなどとも熱心な聴衆の方々とお目にかかれる機会をいただいたことを、感謝いたします。それから、特に木戸彩恵先生、それからサトウタツヤ先生に、こちらへの訪問を可能にさせていただいたことについて感謝申し上げます。

今日はイマジネーションについてお話しするためにやって参りました。ライフコースにおけるイマジネーションということです。私がイマジネーションについて最も重視していることを説明しますと、直接的設定を抜け出して、過去や未来、現在において可能なことや不可能なこと、それらも探索することを可能にする経験を作り出すプロセス、と、このように説明ができると思っております。イマジネーションというのは実は心理学の中でも非常に長い歴史を持っています。主に、子どものイマジネーションについて研究がなされてきた、ということです。イマジネーションは子どもが認知的な能力を作り上げていく基礎になる、そういう、発達していくために必要なものと考えられているのですけれども、ここでは、少し違った見方をご紹介したいと思っています。それは、社会文化的なプロセスとしてイマジネーションを考えるということです。それによって、イマジネーションが人間の誕生から死までの発達の中で、非常に重要な役割を果たしていることを説明していくものです。

さて、イマジネーションなのですが、一人でイマジネーションを広げることは、なかなか難しいわけですね。イマジネーションができるということは、過去の人たちがイマジネーションを使って作り上げてきた世界の中に私たちがいるからこそできるものです。そういうこともありますので、私が共同研究者、この議論を一緒に作ってきた共同研究者をご紹介しておきたいと思います。まず Alex Gillespie 先生、それから博士課程の学生、若い共同研究者であります、Martina Cabra さん、それから Hana Hawlina さんと、Oliver Pedersen さんをご紹介しておきたいと思います。

今日の話は全部で3つの部分から成り立っております。まず最初の部分では、人間の発達に関して社会文化的な観点からどのように考えるかについてお話しします。その上で私のモデルを紹介したいと思っています。2番目、これが私の話の中核にあたるわけですが、社会文化的なダイナミクスの

中でのイメージネーションの発達について、それから、それがどのように人間の発達に関わっていくのかについてお話しします。最後に3番目の部分で、このアプローチが持っているインプリケーション、示唆について、たとえば、社会的な変革にどのように関わっていくのか、あるいは教育とどのように結びつけて考えることができるのか、そしてそれをどう広げていくのか、ということをお話ししたいと思います。

### 1-1. 発達の社会文化心理学

最初に、私がどのような研究上の位置づけを持っているのかについてお話しします。こちらに来られているみなさんも、発達研究をなさっているのではないかと思いますけれども、私も発達研究のスタンスを持っています。人はどのように発達していくのか、まさにそのプロセス、ダイナミクスについて考えているのが私のスタンスです。そして、その時に、規範的に、「発達というのはこうあるべきである」と、あるいは「このようにこう、進んでいくべきだろう」というような言い方は、必ずしも取らないようにしているところです。むしろそうではなくて、アメリカのプラグマティズムのデュエーイの考え方にもありますけれども、発達というのはトランザクショナルだろうと。やりとりを通して発達していくのだということについて、大変重視をして研究しております。

私の研究ですけれども、社会文化的アプローチというアプローチをとりますけれども、大きく分けて3つの研究の流れをもとにして考えています。まず1つ目が文化心理学のアプローチで、これはヴィゴツキーが考えたものが主流になっているわけです。媒介という言葉がありますけれども、文化的な媒介物を通して人間の認識、発達が進んでいくのだという観点をとるヴィゴツキーをもとにした文化心理学の考え方です。この研究者の中には、たとえば、Jerome Bruner, Michael Cole, あるいはJaan Valsinerといったような研究者が含まれることとなります。続けてもう一つ、発達に関する社会心理学的なアプローチということについて、私の考えのもとになっています。これは発達においてインタラクションの役割をとっても重視する考え方です。私の研究は、たとえば Anne-Nelly Perret-Clermont 先生であるとか、英国の Gerard Duveen 先生などの研究に触発されて進んでいます。最後に、精神分析についても触れます。精神分析がなぜ大事かといいますと、人の主観的な経験であるとか、情緒的な経験について考える上で、精神分析の考え方が助けになるところがあるということです。名前をあげるとしますと、Donald Winnicott であるとか、Sigmund Freud というような研究者があげられると思います。

さて、文化的に発達というものが決められてくる、ということについてお話をしたいと思っているのですが、ただ、それはこの例、階段のような、こういう形での発達というものをイメージしているわけではありません。

### 経験の領分

私がどのような発達の見方をとるかといいますと、ここに出ている考え方になるわけです。どの年齢層でも共通するプロセスにむしろ着目していきたいと思っています。人が社会的な世界、私たちが住んでいるのは文化的に決められた世界なわけですが、そこを探究していく過程で起こってくるということについて非常に一般的な形でお話をしたいと思っています。その時に取る考え方が、経験の「領分」(※原文 sphere) というものに私たちが、次々関わって参加していくことで発達していくのだと

いうものです。それがどんなものか、たとえば同じようなことを繰り返しやっていく、たとえば自分が何者であるのかといったことをそこで表していくようなやり方の 1 つの単位のようなもの、と考えていただけたらいいかなと思います。また、状況の中にある、ある種のルーティンであると考えていただけたらいいかなと思います。

まず最初は、赤ちゃん、乳幼児の頃には養育者との関係の中でそういう、一連のルーティン的なやりとりを作っていく、その中で発達をしていきます。それが徐々に分化していく、枝分かれしていろいろな形になっていくということが起こってきます。それが大人になりますと、さらに sphere、領分というものいろいろな形で広がっていきます。それはたとえば仕事をするとか、あるいはプライベートなことでもそうです。たとえば、ある時に「もうスキーをするのはやめた」といって、その sphere が消えてしまうこともありますし、新しい趣味に関わるようになって、それが増えていくこともある。大人の世界になると、そのように、経験の領分というものが広がりますし、消えたり、増えたりということも起こってくるのだということです。

この経験の領分についてですけれども、非常に自分の近くにある、「近接する」ということもあります。たとえば、今、ここにいるというのはまさに 1 つの sphere にいる、領分の中にあることになります。これは非常に自分に近いところにある経験の領分です。ですけれども、そういう「今、ここ」という以外の領分というものも考えることができます。それは、たとえば先ほどスキーをするのをやめた、という例をあげたわけですが、「昔スキーをやっていたころこうだったな」と思い出すことはできるわけです。そうすると、これは「今、ここ」ではないけれども、自分と少し遠くのところにある、遠隔的な、そういう領分と考えることができるわけです。

## 発達

私たちの発達というのは、1 つの領分の中で起こることがあります。たとえば何かを学んでいく、勉強していくというのはそれぞれの経験の領分の中での現象の例と考えます。それから領分間を、スライドで「交差して」と書かれていますけれども、トランスファー、転移させていく、あるところで学んだものを別の領分で使うようになっていくことも起こるわけです。そういうふうに繋がっていくところがあります。さらに、ある人生の中では、私たちが持っている経験の領分というものを全部組み直すといいますか、作り直すようなことも起こってくるわけです。こういう考え方で発達を考えますと、それはたとえばエリクソンが言っていたような、自分の同一性をどのように維持していくのかということにも結び付けて利用することができることになります。

さらにここにイメージーションというものを付け加えたいと思っているわけです。イメージーションというのは経験の領分から離れていくこと、「こういうことができるかもしれない」と考えて、そこから離れていくことが、まさにイメージーションということになります。

### 1-2. イメージーション

イメージーションというのは、実は西洋の哲学、あるいは心理学の中で、非常に長いこと取り扱われてきたものです。まさに目の前にないものをイメージすることがイメージーションなわけです。たとえばフランスの 17 世紀のデカルトが、三角形を例にして定義をしています。それは単に理解をしているということではなく、まさに目の前にあるようなものとしてイメージーションを考えていくと

このような説明をデカルトがしています。こうした定義は、イマジネーションとは何かということについて戦わされてきた議論の一部となっています。イマジネーションについて考えられてきた議論にどんなものがあるかといいますと、たとえばイマジネーションというのは、今まで経験したことをもう一回頭の中で思い浮かべるのがイマジネーションなのか、それとも何かクリエイティブに新しいものを作り上げていく、そういうイマジネーションもあるのか。あるいは、それを言い換えると、何かをした結果としてイマジネーションがあるのか、むしろそのプロセスとしてイマジネーションがある、できあがる過程がイマジネーションなのかと。それから、イマジネーションというのはビジュアル、視覚的なものなのか、それともたとえば音楽のように他のモード、感覚も含まれたものなのか、といったことです。それからもうひとつ、イマジネーションというのは子どもが非常にプリミティブな形であるものなのか、それとも大人が非常に高次な精神機能としてするものなのか、そういうふうに、イマジネーションとは何かということについて、いろいろと議論が交わされてきています。

今、非常にたくさんの議論があると申しましたけれども、ここではヴィゴツキーの考え方を重視していきたいと思っています。ヴィゴツキーはどんなふうに主張しているかといいますと、イマジネーションというのは非常にクリエイティブ、創造的なものだということです。それから視覚的なものだけではなくて、いろいろな感覚、知覚の中で起きることである、ということです。また、人と人の間で起こることだという、個人が一人であるものではなく、人と人の間で起こってくるものだ、ということです。そして、非常に複雑な高次なことなのだという。ヴィゴツキーの考え方に沿っていくとそういうふうになります。この考え方に関連して、たとえば Singer 夫妻であるとか、Harris であるとか、Taylor、これらは遊びと想像上の友達とか、そのような子どもの想像についていろいろな研究をした研究者たちですけれども、そうした研究がなされています。ただ、ヴィゴツキー的な発想で考えたときに、そういう既存の研究には若干、弱いところがあると私は考えています。それは、ヴィゴツキーが考えていた社会文化的な側面を重視すべきであるということになります。その点が、今までの研究では少し弱いかなと考えています。

そういうことで、ヴィゴツキーがイマジネーションについてどのように語っているのかについて今、ここにお示しをしています。1930年代ですので、社会主義下での人々の生活、未来の生活であるとか、過去のことも、とても遠い過去のことも思い描くことができると。そういうふうにして、ヴィゴツキーがイマジネーションの説明をしています。ただ、ヴィゴツキーが本当に昔の、ここでいいますと、先史時代の人類というようなことについて、実体験を持っているかということ、そうではないわけです。それがどうやって、ヴィゴツキーはそれを想像できるかといいますと、たとえば、参考になるものであったり、本であったり、そういうふうに社会が作り上げてきた複雑なものに触れることを通して、ヴィゴツキーは非常に昔の世界についてイマジネーションを広げることができるというわけです。

こうしたことをふまえて私たちはイマジネーションを、スライドにありますように定義をします。「今、ここ」から離れて、いろいろな、「今、ここ」ではない世界について、あるいは、「今、ここ」にはない、遠いところにあることについて、探索し、没入するということです。そういうふうにして、「今、ここ」から離れていくというのがイマジネーションの定義としております。

### ループとしてのイマジネーション

さらに、イマジネーションはループである、というふうに私は表現したいと思っています。「今、ここ」から、ループになっているところが、離れていくことを表すわけです。たとえば、今ここから森の中に散歩に行こうか、といったことを考えるのがループです。「今、ここ」から離れて、また戻ってくる、離れて戻ってくるということがあるので、ループとしてイマジネーションを表現しているということです。

### 継起

次に、イマジネーションがどう起こるかについて、時間を追って考えていきたいんですけども、まず最初にトリガー、引き金になることがあります。それは何か問題が与えられることかもしれません。たとえば、子どもが毛布と棒を与えられて、これで家を作ってね、といったことを言われる。これが問題になって、イマジネーションをそこから広げていくきっかけになるわけです。そういう、子どもにとっての問題が与えられることもそうですし、若者にとっては、何か教室で話を聞いていて、つまらないな、退屈したなというときに、それがきっかけになって、イマジネーションが広がることもあるでしょう。それからたとえば、子どもがごっこ遊びでお父さんごっこ、お母さんごっこをやるよという場合、その、「やろうよ」というきっかけが社会的に決められたイマジネーションの出発点になるということです。それからまた、映画館に行って、まわりが暗くなると、今から始まるぞというとき、トレーラーですね、最初に予告編みたいなものが流れ始めると、これからイマジネーションをし始めるんだなという、これも1つのトリガーです。少し別のこととして、非常に困難な状況というのがトリガーになる場合もあります。それはたとえば、病気になって非常に苦しい痛みを経験しているときですとか、それから刑務所に閉じ込められてしまっているようなとき。ここから、どうやって脱出していくのか、そういうことを考えるときも、それも1つのトリガー、イマジネーションのトリガーとして働くように思います。

このループの一番あがっているところ、丸くなっているところについて、これがまさにイマジネーションになるわけですが、これをするためには、材料になるものがたくさん必要になってきます。それは、社会的に共有されているものです。たとえば、子どもが「これで家を作ってね」と言われたら、子どもたちは自分が今までに見た家がどんなだったかなというのを1つの材料として、資源として使っていくことになります。それから、映画を見るという話がありましたけれども、そういうものを見るときに、たとえば今までに本で読んだようなことが資源として使われることもあります。そういうふうに個人の経験だけではなくて、社会的に共有されたイメージのようなものが資源になることもあります。たとえば、社会的にお父さんってこんな感じ、お母さんってこんな感じと、そういうイメージというのが、社会的に共有された表象としてあるわけですが、そういうものも関わってきます。それから、オブジェクトの実物、たとえばペンを、ボードに見立ててみよう、といった感じで、ものを材料にして見立てて、何かを想像するというようなこともあります。そういうふうに、いろいろなリソースを使って、私たちはこのループの想像を広げていくわけです。そういうことがありますので、私たちがリソースをたくさん持っていれば持っているほど、イマジネーションを広げていくことができると考えられるわけです。ヴィゴツキーがやや挑発的な言い方をしているのですが、子どもよりも、大人の方がイマジネーションを広げられるのだということです。それは、いろ

いろなことを知っているからです。たとえば、家を建てるとか家を作るということを考えたときに、子どもが家について知っていることと、建築家でそれを専門にしている人が知っていることでは、随分違っていて、建築家の人はやはりいろいろな歴史であるとか、建て方であるとか、そういうものについてたくさんを知っている。それを使って、新しく想像を広げていくことがより可能になってくる、そのようなことをヴィゴツキーが言っております。

想像をしたあと、今度は現実に戻ってくる、最後の部分があるわけです。ドリームの世界からなかなか戻ってこられないと、それはそれで困った問題になってきます。こうして、現実世界に戻ってくるとき、想像したことによって、何か新しいものが得られるわけです。それは単純に言うなら、想像してみて楽しかったな、みたいなこと、あるいはちょっとすっきりした、リフレッシュした、というような、そういう感覚かもしれませんし、何か新しいアイデアが浮かんでくるということかもしれません。どんな家を建てようかみたいなことかもしれません。そういうふうに、人々はイメージーションを使うことによって、世界に新しいものをもたらすことも可能になるということです。

### 3つの次元

今、先ほどまでお話ししていたのが、まず、イメージーションのファーストステップ、一番基礎的なことです。ここから今度は3つの次元から考えるということを導入していきたいわけですが、まず最初に考えますのは、時間になります。今、ここで3つ、ループが前に傾いているものと、後に傾いているものとあると思います。まず最初に、横の流れが時間だとしますと、anticipating、予期することです。たとえば今日、外、建物を出たら、ゾウがそのへんに立っているかもしれない、これは1つ予期をすることです。逆に、後ろ側に倒れているのは、これはrememberingですから、思い出す、想起するということになります。過去のことを考えるということです。過去について考えるというのは単純に自分の過去を思い出すことだけではありません。たとえば、私が12世紀のことについて考える、12世紀の日本について考えるとなると、本とか資料にあたって、その過去のことについてイメージしていくことになります。そして逆に予期をする中に含まれるのは、たとえば、今日、ごはんはきつとおいしい日本食を食べられるんだろうというのは、これは予期の機能ということになります。そういうふうに予期、それから想起ということで、ループは時間的に、これからのことについてもあてはまるし、過去のことについてもあてはまるのです。

次が二番目の次元になるわけですが、これは一般化の次元です。とても具体的な想像というもの、それから非常に抽象的なものがあります。具体的なものとしては、たとえば、棒を使って、それを見立てて遊ぶというようなこと。これは、具体的なものに基づいた想像ということになります。逆に、世界の平和のようなことを考えていくと、それは非常に抽象的な一般化が高いものになってきます。

最後が実現可能性、不可能性の次元と呼んでいるものです。これは、ありうるかどうかというようなことです。たとえば、今日の夜、おいしい日本食が食べられる、これはきつとありうることだろうと私は思っていますが、外に出たらゾウがいるだろうというもの、これはありえないだろうなあとということです。ただ、このありえないというのも、条件によっては意味が変わってくるわけです。たとえば、レオナルド・ダ・ヴィンチは、当時は本当にありえないような、たとえば空飛ぶ機械のような

ものを想像していたわけですが、歴史が変わっていけば、今はそういうレオナルド・ダ・ヴィンチが想像してきたようなものは、十分ありうるものになってきているわけです。

### インプリケーション

このようにして、イメージーションには様々な機能があるのだということがおわかりいただけたのではないかと思います。過去のことから未来のこと、という次元に沿って、様々な形でイメージーションはできるのだということです。

次に、ライフコースを通して発達していくということについてです。これはどういうことかといいますと、子どもがイメージーションを使う際、そのキャパシティに応じて、イメージーションというのは生涯の中で徐々に発達をしていくということです。

ただ、単純に認知的に発達していくからイメージーションが発達していくのではないのです。それは、私たちを取り巻く社会的な環境が変わることによって、イメージーションも変わっていくのだということです。だから、個人の発達それだけで説明できるものではないということです。

つまり、認知的な発達ではなくて、社会文化的な条件、あるいはその環境との関係の中で発達していくという考え方をとることになります。

## 2. イメージーションと発達

### 2-1. イメージーションの発達

ここから、いろいろな研究について紹介していきたいと思います。今お話ししましたように、人々の想像力が社会的なやりとりの中でどのように変わるのかということ、いくつか例示しながらお話ししていきたいと思います。

#### 乳児

まず最初に、乳児期の話からしたいと思います。みなさんご存じの研究かもしれませんが、Trevarthenの研究を紹介したいと思います。彼が示したのはどんなことかということ、赤ちゃんがいかんして大人とのやりとりにうまく参加できるようになっていくかです。なぜできるようになるかといいますと、それは大人が次に何をしてくれるのかを、予期することができるようになるので、赤ちゃんは大人とのやりとりにうまく入っていくことができるのです。だから彼の研究の中で、大人がちょっとやりとりのリズムを変えるだけで、子どもは強くそれに反応してしまっ、うまくいかなくなってしまうことがあります。子どもが、大人が次これをするぞ、というのを予期して、やりとりに参加しているからではないかと考えられるものです。これはまさにイメージーションの本当に原初的なあり方となっています。他にも子どもは徐々に、たとえば音を組み合わせ、いろいろな変化をさせていくようなこともしたりするようになりますけれども、こういうふうに、子どものうちから実はそういう予期をして、やりとりに参加していきます。ここで重要なのは、アジャストメント、つまり、お互いにやりとりを調節して、うまく成り立たせていく仕組みです。

次の例として、Reddyという研究者たちの、乳児のふざける、おどけるというような現象についてお話ししたいと思います。髪の毛をつかんで遊ぶとか、お父さんの真似をするとか、いろいろ、いたずらのようなことをする例が出ています。これも実はイメージーションの力によるということです。

つまりそれは、そういう真似をすることによって、今ここの状況を少し変えていくといえますか、「今、ここ」から離れるということによって、おふざけというのが成り立っていくことになるわけです。それを成り立たせているのは、今度は *mutual pleasure* というもので、一緒に楽しめるということが、子どもたちがこういう行動に従事していく上で重要な役割を持っていることとなります。

これを先ほどの図に表すと、ここに書かれたようなこととなります。赤ちゃんがしているイマジネーションは、とても具体的なものです。自分の過去の経験をもとにして、それを使って、やりとりをしていくわけですから、一般化というところについては非常に弱いことです。しかし、そういう自分の経験をもとにしてやりとりをしていくと、その結果として現れる、現実に戻ってきたときに現れるのは、*pleasure*、楽しい感覚ということになっているわけです。

## 幼児

次に子ども、幼児期の話をしたいと思います。幼児期になってくると、先ほどは非常に具体的などころでしか想像できなかったところが、もっと離れて自由になってきます。たとえば、このペットボトルを「ロケットだ」、とって遊べるのは、これは、赤ちゃんのときに比べるとずっと自由に想像を広げられるようになってきたことがわかるわけです。ですけれども、自由だからといって、際限なく広げられるかという、そこに制約がかかってくるということがあります。今、ここで紹介するのは、Martina Cabra さんの研究の観察記録です。けれども、ここにある、人形を使って遊んでいる場面に、彼女と一緒に参加して遊んでいるんですけども、そこで研究をしている自分が、女性騎士、女性のナイトだ、ジェンダーに関心がある研究者なので、そういうことをわざわざ聞いてみたわけです。そうすると、子どもたちが、“*knightess*”なんてない、女性の騎士なんてものはないんだ、と返してくるようになりました。そういう現象がありました。

もうひとつ例をあげますと、これも先ほどの、Martina Cabra さんの研究です。女性の研究者ですけれども、子どもに「私、カエルにされちゃう」と言いました。そうすると、ルーシーが、「あなたはカエルにならない、女の子はお姫様になるんだ」と言った。これは非常に興味深い例なわけですが、どうしてそんなことを言うかですね。昔から言われているストーリーの中で、カエルっていうのは王子様が姿を変えられたものなんだというような理解が子どもたちの中にある。だから、女性がカエルに変えられるなんてことはないというようなことです。それで、この子は、あなたは、カエルにはなれない、お姫様になるんだ、と言っているわけです。先ほどの例と、それから今の例というのは、社会文化的に共有されたいろいろな規範があって、それがイマジネーションをガイドしていく、方向づけていくことを示しているわけです。ですから自由なイマジネーションをこういう社会文化的な規範が方向づけながら、イマジネーションが起こっていくこととなります。

これは、私（※通訳）の研究を紹介していただいたものです。幼児期に子どもがお母さんと幼稚園でどんなことをしたか、話をしている場面を録音してもらって、それを分析した研究です。先ほどは社会文化的な制約によってイマジネーションが限定されてしまうという例だったわけですが、逆にこの例は、むしろ子どもがお母さん、お母さんは何が起こったか正確に知らないわけですが、そのお母さんとの共同作業の中で、対話を通して、イマジネーションの世界を共有して、広げていくことになるわけです。こういう例も、この時期に起こってきます。



## 青年

さらに青年期に入ってきますと、一層、想像ができる世界が広がっていくことになります。たとえばそれは、単に現実の世界だけではなく、バーチャルな世界、インターネットなどそういう世界も含めて、想像の世界は広がっていくことになります。それが青年期です。ここでは、そういう青年が従事するイメージーションの中でひとつ、学校で起こることについて、お話ししたいと思います。

これは、Grossenさんと共同研究で行った学校でのやりとりの分析ですけれども、哲学の先生が、哲学の問いとして、現実というのは美しいものだけなのだろうかという問いを生徒たちに投げかけたわけです。そうすると、生徒はそれに反応していろいろなことを言います。たとえば広告、いろいろなところに広告があって、中には美しいものもあるけれども、すごくショッキングなものもある。それから、ストリートアートのようなものもいろいろな内容があって、中には非常に意識を高めるようなものもあるし、そうではないものもあると。つまり、生徒たちは先生の問いに対して、自分が持っているリソースを使って、ディスカッションに参加をしようとするわけです。ところが、このクラスの先生は、「いや、そういう広告とかストリートアートについて話がしたいわけじゃないんだ」といいます。「今、ここで考えているのはフィロソフィーである」ということなので、たとえば、古典的な詩の中にも美しい詩だけれども、それが醜いものを描いている、というようなことがあるだろう、というふうに、生徒がせっかく自分の身の回りのことから持ち出してきたものを、先生が、それではないんだというふうに、イメージーションを止めてしまうということが起こるわけです。

これを図に表しますとこういうことになります。美について考えるというのはすごく一般的な、抽象的な議論になるわけですけれども、ここでは先生が、今、赤い矢印になっているわけですけれども、ここではそういう話ではないんだ、というふうに、それを止めてしまう、制約をかけてしまうことが起こっている。このように図で表すことができるんじゃないかと思います。

## 成人

最後に成人の例についてお話ししたいと思います。環境がいかにしてイメージーションと関わってくるのかということについてです。これは、私がサトウタツヤ先生と共著で書かせていただいた論文の中に出てくる例ですけれども、福島で避難をされて、仮設住宅に住んでいるSさんという女性のお宅を訪問したときの話です。この、サトウ先生と共同研究者の人たちがお宅を訪問して、この写真を見つけました。「なぜこれを飾っておられるのですか」と質問をしたところ、「これが私の故郷のことを思い出させるんだ」とお答えになったということです。でも、ここに写っているのは、白い服を着た、除染作業をする方です。なぜこれがSさんにとって私の故郷を思い出させるのかというのが1つの問いになってきます。

その写真について、これを飾っておられる理由というのが、実は2回目に訪問して、また調査をされたときにわかったということです。その2回目の訪問のときに、旦那さんのお骨を持って、自分の故郷と申しますか、住んでおられるところに戻ることができたと。それで今非常にハッピーですというふうにSさんがおっしゃっていたということです。そのときにわかったのは、先ほどの写真ですけれども、白い服を着た人が中心にあるわけですけれども、実は大事なのはその後ろに写っている丘なわけです。そこにお墓があったんですけれども、避難をしているのでそこに戻ることができなかった

と。今、そういうふうにお骨を持っていくことができたので、それがまた現実に再び戻ることができた。それによって、今まで止められていた過去についてのイメージーションというのが、現実に戻るといふ作業を通して、今度はSさんにとって将来を考えることにも結び付いていく、そういうふうに、いったん止まっていたイメージーションが再訪問することによって再び動き出すようなことがここで起こったということになると思います。

### 統合的理解

ここでひとつまとめ、統合的な理解を示しておきたいと思います。まず、お話ししたいのは、イメージーションというのは、簡単でシンプルなプロセスではなく、非常に文化的なものによって媒介されているプロセス、社会文化的なものなのだと思います。そのような社会文化的なプロセスは、今ここでお示したような例でもおわかりと思うのですが、イメージーションを促していく場合もあれば、制約する、阻害することもあります。具体的にどんなことが関わっているのかですが、たとえば関係性の質というようなものです。一番象徴的なのは赤ちゃんのやりとりだと思うのですが、mutual pleasure, いい関係があるかどうかによって、想像が広がっていくかどうかは変わっていきます。どんなふうに人が関わってくるのかをお互いわかっているかどうかも大事です。それから、先ほど、高校の授業の話をしましたけれども、どんなふうのリソースが使えるのかということも関わってきますし、大学とか学校というのは、イメージーションのスペースなわけですが、そういうスペースがあるのかも関わってきます。それから、イメージした結果、どんなことが可能になったのかがきちんとわかるのかも、イメージーションの発達過程に非常に関わってくると思います。このようないろいろなことが関わった、社会文化的なプロセスとしてイメージーションが起きるのです。

### 2-2. 発達におけるイメージーションの役割

ここまでイメージーションの発達についてお話ししてきましたけれども、最後にイメージーションが人の生活、あるいは人生の中でどのような役割を果たしているかについて、お話ししていきたいと思います。

### 遊びと発達

最初は子どもたちについてお話ししたいと思います。子どもたちの遊びとイメージーションについてたくさん研究がなされています。その発達の機能にどんなものがあるのかを考えると、最初に申し上げたいのは、子どもが経験していくであろういろいろな社会的状況について試していく、イメージーションを使って、遊びを通して試していくことです。たとえば学校に行く前に、学校ごっこをしてみても考える、お医者さんごっこをしてみても考える、そういうものは自分たちが経験した複雑な社会的な経験というものを試していくことになります。さらにそこには感情的な側面も入ってきて、自分がそこでどんな気持ちになるのかも、想像の力を使って作っていくことになります。それから、認知発達の側面もあります。これはヴィゴツキーが発達の最近接領域という言葉で話をしているわけですが、認知的な発達もイメージーションの力を通してできあがっていくところがあります。それから、身体的な発達にも関わってきます。たとえば、子どもたちが木登りをして遊ぶ、ということについても、実はイメージーションの力を使って、関わっていくことでできあがっていくわけです。そ

ういう意味では、身体をいかに使うかということにも、イメージーションの力が重要な役割を果たしているということになります。

### 若い人たちにおけるイメージーション

その上で、今度は若い人たちのイメージーションですけれども、それは単純に、テレビゲームばかりやっているというようなことではないということです。まず、学校でイメージーションが積極的に求められる、ある種規範として求められているということがあります。たとえば学校で、職業選択について考えるということをするわけですけれども、これはイメージーションの力を使って、職業選択を考えていくことになるわけです。ですので、学校でそのように非常に高く評価されるものとしてのイメージーションというのが一方であります。ですけれども、あまり重要ではないと思われているイメージーションもあります。若い人は小さい子どもたちのように遊ぶということとはしませんが、先ほども言いましたように、テレビゲーム、ビデオゲーム、インターネットのゲームをしたり、それからマンガに出てくるコスプレの遊びをしたりですね、そういういろいろな遊びをしていきます。感情的、情緒的に発達していくことを考える上で、実はこういうイメージーションも重要な役割を持っていますし、最近では認知的発達でも意味を持っているのではないかというようなことも言われています。

もうひとつ青年期の話について付け加えますと、人生の中でどのように生きていくかについて選択を迫られる場面というのがあります。人生の分岐ということが起きます。たとえば、大学に行こうか、それとも就職しようかというのは、これは一つの、分岐になるわけです。そこでどうするかを考える、これはサトウタツヤ先生の TEM の考え方にもあるわけですけれども、この分岐のところイメージーションの力、イメージーションを働かせることが重要な役割を持っていると思います。

人生にはいろいろ分岐点がありまして、どんな学校に行くか、これは分岐点なわけです。では、ここで選ばれなかった選択肢というのは、全く意味がないのかというと、実はその後の人生に影響していきます。これは最初に出てきた sphere で言えば distal、非常に遠いところにある、「今、ここ」ではない生活なわけです。けれども、たとえば医学部に行こうと思ったけれども行かなかった人に見れば、それは実現しなかったことですが、その先の将来に影響していくことになります。たとえば、医学部に行かなかったけれども、ナースになろうというふうを考えたり、お医者さんと結婚しようかと考えたりです。それから、お医者さんが出てくるテレビ番組にも興味を持ったりというような形で、選択されなかったものであっても、実は今の現実の世界に影響を与えるものになります。

### 成人の生活におけるイメージーション

さらに、大人になってからについてお話しします。大人になりますと、イメージーションの場というのは非常に増えていくわけですが、ここでは2つの例をあげます。1つは世代的役割、子どもができて親になるということの中でのイメージーションの話をしたいと思います。ずいぶん前になりますけれども、親たちが子どもの名前を考えるプロセスについて研究したことがあります。そこでは、イメージーションの力が大きい役割を持っていました。たとえば、子どもの名前を考えているときには、子どもがどんな子になってほしいか、どういう特徴、能力を持った子になってほしいか、どうやって生きて行ってほしいか、あるいは関係の中でどんなことをしてほしいのか、そういうことのイメージーションを広げていくことによって、名づけを考えることになります。そういうふうな、親

になる過程でイメージーションはとても重要な役割を果たしていますし、それは子どものことをイメージするだけではなくて、親になった私たち、自分たちというものをイメージすることでもあるわけです。

また、移民について、今、いろいろなところで、アメリカでもヨーロッパでも移民、あるいは難民として動いている方がいることについてご存じだと思います。そういうふうには、人々が移動していくことについていろいろな研究がなされているのですけれども、その中でイメージーションが重要な役割を果たしていることがわかってきています。それは、今、ここにいるその世界と、それから、移っていった先がどうなっているだろうというふうには、geographicalに、地理的に離れたことについて、あるいはそこでの生活が、きっといい生活ができるんじゃないかと、そういうようなイメージーションを広げることが、移民する、移住をするプロセスの中で、重要な役割を持っているということが言われております。

今、ここでこれからどうなるかわからないから、あるいは想像ができないから移る、移住することを考えるという場合もあります。つまり、ここでの将来が見えないということです。今お話ししたのはPedersenさんが研究した、フェロー諸島という、デンマークとイギリスの間にある小さな島ですけれども、そこに住んでいる25歳の方の移住についての話です。家族を持とうかなあと思っているんですけれども、それは、非常に小さい島での将来ではない、ということです。彼は、その島に住んでいたときに見える将来というのは非常に、見えない、想像ができないために移住を考えているのです。

### 老人の生活におけるイメージーション

最後に、老人、お年寄りの生活についてお話ししたいと思います。老人にとってもイメージーションは大事だと言われてはいますが、一般的に老人というのは過去のことを思い出しながら生きているのだ、というようなイメージがあるのだと思います。老人の研究をしっかりとしていきますと、実はそうではないのだということがわかります。今、いろいろな研究で、お年寄りにとっても、好奇心を持つこと、それから、possible selfという、こんな人間になりたいなど、なりたい私をイメージする、そういうことが生きていくために非常に重要な役割を持っているということがわかりました。それが生きていくための意志のようなものに繋がっているということです。

お年寄りについてやはりGrossenさんと研究をした内容の話をしたと思います。retirement homeというところを訪問しましていろいろな研究をいたしました。そのときに、多くの方がベッドの近くに、いろいろなものを置いて過ごしていることに気づいたわけです。

例をあげますと、先ほどの写真にもありましたように、ベッドサイドにいろいろなものがあるわけです。たとえば写真であったり、キリスト教のマリア像であったりいろいろなものがあります。たとえば写真について、Isabelleさんという人が、「私の家族の写真です」というような説明をしています。この写真について、「いい思い出がある」ということは、これは過去について、自分の家族の過去について話しているというわけです。それから、「みんな何しているんだろうか」というようなこと、これは今の時点での彼ら、見えないけれども、今の彼らの様子について想像しているとか、考えていることです。そして、「みんな良い人生を送ってほしい」というのは、将来について考えてい

ることになります。つまりそういうものを手がかりにしながら、過去を追憶するだけではなく、今のことについても未来についても、この Isabelle さんは想像を広げているところがあります。

もうひとつ例をお話ししますと、先ほどの写真の中に、マリア像を持っている方がおられました。このマリア像はカトリックの人たちにとっては、巡礼のシンボリックな意味があるわけですが、それについて、Clara さんという人が、今年には行けなかったけれども、来年こそ、というふうに言っています。車いすに乗っていらして、そういう意味で旅行するとか移動することについて制約がある状態ですが、でもそういうふうで過去のことだけではなく、これから行きたい、また行きたいということについて、しっかり思いをめぐらせている、イメージーションを使っているということが起きています。

## 統合的理解Ⅱ

今お話したような例を考えますと、イメージーションというのは、若い、子どものうちからお年寄りまで、本当に人生の最初から最後までとても重要な役割を果たしております。

### 3. インプリケーション

#### 3-1. イメージーションはなぜ重要？

最後に、まとめに入りますけれども、大きく分けて2つのことについてお話します。1つは、なぜイメージーションが重要なのか。これは今まででもだいぶお話をしてきたことなわけですが、それについてお話をします。もう1つは、イメージーションを広げて促していくために、どんなものが必要なのかについてお話します。

まずその重要性についてですが、先ほどからお話ししましたように、イメージーションを使うことには、結果がついてくるということです。赤ちゃんの例があったと思いますけれども、イメージーションを広げて、楽しいというような結果もありますし、問題の解決が持てるということもあります。何か新しいものがそこから創造されていくという場合もあります。そういうふうには、イメージーションというのは、何か結果をもたらす上でとても重要です。しかもそれは単純にその個人の中で起こるわけではないのです。人との関係の中で共有されることもあって、たとえば数学で問題を一緒に解くことによって、共同的にイメージーションを働かせて結果を得るということもあるわけです。

共同でイメージーションを広げることについてですが、理科のクラスで、「石はいったいどこから来るんだろう」ということについて議論をしたやりとりについて研究をしたことがあります。そうすると子どもたちは、そこで非常にいろいろな、ちょっとそれはないだろう、みたいなものも含めて、イメージを膨らませていくわけです。そういうことをみんなですることを通して、最終的にはとても正しい結論に辿り着く、ということが起きていたりします。これが共有したイメージーションの効果という例だと思います。

そういう何人かの子どもが共有するというだけではなくて、世代を越えてイメージーションが共有されて発展していくということがあります。共同研究者の Gillespie 先生と研究をしたんですが、月に人が行くということについて、歴史の中でどんなふうには想像されてきたのかについて歴史的な研究をしたことがあります。本当に昔の絵ですね、月に人が行くことを想像した絵から始まって、

いろいろな物語が描かれたり、それから映画が作られたり、そういうふうに、月に行くということが、世代を通して共有されて徐々にイメージーションが広がっていくことが起きています。それと並行して、科学的な技術が発達していくことによって、本当に月に行くことが実現したわけです。これは、世代を越えてイメージーションを共有することで、結果が得られているという例です。他にも物語であるとか、絵であるとか、そういうものは、単に書いた人のイメージーションであるだけではなくて、他の人に非常に多く共有されるイメージーションとして機能しています。

それは今の世界についても考えられます。たとえば、気候変動について今、特に若い人たちも含めていろいろな人が議論をしていることがあります。まさにあれは未来についてのイメージーションが共有されていたり、あるいは、場合によってはいなくなったり、ということで起きている議論になると思います。日本でどうかというのはちょっとわかりませんが、ああいう例も、イメージーションが非常に広く共有されたことによって起こっていることだと思います。

もうひとつ、Hawlina さんの研究から、社会の変化がいかにイメージーションと結びついているのかについてお話ししたいと思います。昔ユーゴスラビアという国がありまして、その一部のスロベニアで起こったことですけれども、社会主義の時代に、若者の祭典というものが実施されることになって、そのポスターのようなものを、Neue Slowenische Kunst というアートグループが作ったわけです。これは一見、若者の祭典ばく見えるわけですが、実はそのモチーフになっているのは、ファシストの時代、ナチスの時代のイメージをそのまま使ってポスターを作っています。これによって何が起きたかという、昔のファシストの経験というのが、まさに今、スロベニアですね、1987年に思い起こされる、イメージーションが広がることによって、今、この社会体制とか政治体制はまじいんじゃないかということについてイメージーションが共有されたわけです。1つのポスターであるわけですが、みんながそれを見て、「あ、そうだな」というふうに気付いて、それが結局非常に大きなスキャンダルになりました。これはポスターの1つのイメージが、そういうふうに社会変革まで結びついていく例と考えたいと思います。アートが世界を変えるということが実際に起こるんだということです。

### 3-2. 結論：イメージーションを促すために

最後にまとめとして、研究だけではなくて、たとえば先生方にとって、それからいろいろな心理的な実践、治療の実践をされている方にとっても、イメージーションを促すためにどんなことが大事だろうかということについて、お話をしていきたいと思います。まず最初に申し上げておきたいのは、個人の capacity、能力が発達していくことだけによって、イメージーションが変わっていくわけではないということです。色々な人との関係、社会との関係が大事です。まず最初にあげられるのが、子どもと大人のインタラクションのクオリティです。子どもたちは大人とやりとりをしながら、非常に濃密な、情緒的な共有をしていくわけですが、そういうものがとても大事な部分です。ただ、最近問題だと思いますのは、子どもたちがどんどんパソコンとかスマートフォンとか、そういうものに出てくる、たとえば動画とかですね、そういうものとのやりとりに沿って育っていくようになっていくことを少し危惧します。それは、大人と情緒を共有することがなかなか難しいからです。

次にリソースへのアクセスということになります。たとえば、先ほどの例で言えば、棒を見てこれ

は馬だと言ってごっこ遊びをする、これはリソースによるわけです。それから、紙を一枚見ただけで、そこから世界というものを考えることもできます。そういうふうに、リソースは非常に重要な役割を果たしています。もちろん、それは発達的なキャパシティとも関わっていて、たとえば、小さい子どもが辞書を見て、それをリソースとして使うというのはなかなか難しいわけです。ですけれども、多様なリソースが保証されることはとても大事なことです。たとえば非常に権威的な社会体制とか、そういうところでは、リソースへのアクセスそのものを制約することが非常に多くなってきます。そういうことがありますので、教育的な意味だけではないわけですが、子どもたちにとっては、非常に多くの多様なリソースに接する環境が重要になってくると考えられます。

3番目ですけれども、イマジネーションのための場所があるということです。これは、実は結構難しいことです。ですが、たとえば学校で教育的な意図を持って遊ぶということだけではなく、本当に純粋にイマジネーションのためのフリープレイスというものについて、実践があります。デンマークではそのように、想像を広げるということを重視した実践が重視されています。そのように、想像ができる場所というのをしっかりと保証してあげることが大事になってきます。

4番目ですけれども、先ほど3つの次元、イマジネーションに3つの次元があるという話をしましたが、それぞれでイマジネーションを広げるためのサポートが考えられます。たとえば、将来のことが想像できない、ということになったときに、その助けとして、たとえば過去のことについて考える。そうすると過去から未来に流れ、繋がりというのがありますから、その中で将来について考えていくことができます。それから実現可能性ということについて言いますと、先ほどの例にもありましたけれども、なんでも想像していいと考える、「それは無理だから考えちゃだめ」とか、「意味がない」というふうに制約をかけてしまうのではなくて、そうやって不可能なものでも、想像してみることが実際に可能な回答を得る、あるいはイマジネーションを広げる上で重要な役割を持っているということになります。それから一般性ですけれども、それについては、非常に具体的なことから始めて、抽象的なことを考えるという場合もありますし、その逆もありますけれども、そういうふうに、先ほどの時間の話もありましたけれども、想像を広げるために3つの次元を行き来する、あるいはそれをコントロールすることによって、イマジネーションが広がっていくということがあると思います。

5番目が、社会的に正当とされることです。たとえば子どもが棒にまたがって、馬だといって遊んでいる、想像の世界で遊んでいるときに、「それ棒じゃないか」と言ったら、もうそこで子どもたちの想像の世界というのは終わってしまうわけです。学生と話をしているときにも、いろんなアイデアが出てきたときに、「そんなの無理だよ」とか「そんなの意味ない」と言ってしまったら、それはそこで想像をすることが終わってしまうわけです。もちろん、時々はそうやって、「それはだめ、無理だ」というふうに言わなければいけないこともあるわけですが、そういうふうに、否定をしまわれないということが実は想像を広げていく上では重要な条件になってきます。

#### 【武藤委員長】

タニア先生、本当にありがとうございました。

(休憩・解説)

★★質疑応答★★

【司会・木戸先生】

ここからフロアのみなさんと一緒にお話ができたらいいなと思うんですけども、まず初めに、簡単などころからで結構ですので、何かこういうところをもう少し聞いておきたいとか、タニア先生にご質問したいこととかをお願いします。サトウ先生の解説に対するご質問でも結構です。英語で質問して下さってもいいですし、小松先生がいらっしゃいますので、おまかせして、日本語で質問して下さっても結構です。どなたか、いらっしゃいませんか？

【質問者 1】

私が質問したのは、ヴィゴツキーの有名なテーゼが、みなさんご存じだと思いますけど、精神間機能、intermental functions というのが、結局、間、精神間機能というのが精神内に移行するというテーゼというか、ありますけれど、それをどう、じゃあインターからイントラになるのかっていうのを描くというのは、結構、ヴィゴツキーの難しい問の1つで、それをタニア先生がどういうふうに難題というか、アポリアに、イメージーションという概念を絡ませて、お考えですか、という質問をさせていただきます。

【質問者 1 による回答の通訳】

それに対してお答えいただいたのは、さっきのループモデルが基本になると思うんですけど、たとえば、いくつか記号がつくなど、リソースというのは、図の中では多分リソースということの表現をされていたと思うんですけど、そのある cultural settings とか、ある状況、対面状況とかっていう状況の中で人と、誰かと関わったりとか、ある出会いとかっていうのがあったときに、その、そこで、どういう情報というのを自分が取り入れるんだっていうのが、そこが、幅があるというか、そこがダイオロジカルというか、外と内というか、精神間、インターサイコロジカルなものとイントラというのがダイオロジカルに展開していくというふうに考えているという。小松先生、そんな感じで大丈夫でしょうか。

【小松先生による通訳補足】

ありがとうございました。ご質問は精神間機能から精神内へというのがどんなふうに起こるのかをいかに記述すべきだろうかということだと思います。それをイメージーション、今日のご講演に関連づけるとどうなるのかということだと思ってしまうんですけども、社会的なやりとりの中でイメージーションを共有するということがあったと思うんですけども、基本になるのは、記号というのがそのやりとりの中で働いているのだろうということです。たとえば、遊びをするときにも、「次何するのか」とか、「今何しているのか」というような、基本的に言葉で共有される部分というのがすごく多いだろ



うと。それで、そういうような言葉で共有して、それがかつ情緒的なものも含めてやっている、ということがあって、それが、まず最初は遊びの中でやりとりとして、観察可能なものとして出てくるわけですけども、それがやがて言葉として、ある種こう、心の中に取り込まれると言っていいのかわかりませんが、そういうふうになっていくのだらうと。つまり最初は想像遊びであっても、言葉を通してやりとりをするというのがメインになっており、それがやがて心の中の言葉のような、ちょっと、私ヴィゴツキーはそんなに勉強していないんですけども、そういうものになっていくのだらうと。その過程を、今、記号的媒介、semiotic mediation という言葉が使われたんですけども、そういうことが起こっているのだらうというふうに解説されたと思います。失礼しました。

### 【質問者 1】

ありがとうございます。

### 【質問者 2】

大変興味深い話、ありがとうございました。想像とか想像力というのはとても興味深いんですけども、素人のときは、なんかこう、想像って何だろうとか思うんですけども、やっぱり研究を進めてくると、だんだんそういうこう、ナイーブなテーマみたいな感じで、大事なんだけど、なんか、捉えどころがないんですけども、先生は何をきっかけにして想像とかイマジネーションの研究にこう、進まれたのか、何かそういう体験とか、これを、イマジネーションのことを研究していこうというふうに決められたのは何かこう、個人的な体験とかがあれば、もしよかったら教えてください。内緒だったらいいです。

### 【回答（小松先生による通訳）】

ご質問ありがとうございました。3つお答えをしたいと思います。1つは心理学史的な意味づけということになります。心理学の草創期の、ジェームズであるとか、あるいはその後のヴィゴツキー、あるいは、今、ちょっと名前が出てこないわっとおっしゃったんですけど、フランスのその時期の心理学者なんですけれども、非常にイマジネーションというものを重視しておりました。それがその後、研究として展開をしていかなかったわけですけども、当時書かれた考え方というのを見ると、非常に興味深いし、かつ、重要なことを指摘しているというふうに思っています。という、心理学史的にこれが非常に重要なものではないかというようなことが1つです。それからもう1つは、先生が研究を始められたときですけども、教育とか、学習に関する心理学をされたわけですけども、そういう心理学というのは、本当に学校の教科、社会であるとか数学であるとか、そういうところで役立つ知識が、どんなふうに得られるかとか、どんなふうに機能するかということの研究していくことが多いんですけども、でも、私たちが学んでいくとか発達していくときには、たとえば、音楽を聴くとか、小説を読むとか、そういうフィクションの世界とか、芸術の世界というのもとても大事な意味を持っているということです。先生自身もそういう、ノベルについて研究を、初めはされたということです。そういうフィクションのことについて研究していくと、必ずイマジネーションが働いている

ということがわかって、とても重要な、やはり役割を果たしているんじゃないかというふうに、研究を始められたときも思ったということです。それからもう1つはメタ理論的な意味です。現在の心理学を見てみると、たとえば、同じようなことをやっているにもかかわらず、すごく細分化して領域を決めてやっている。学習とか教育についても発達についても非常に細かい領域に分けて研究をしているわけですが、でもやはり、それを統合的に理解するための理論というのが必要なのではないかと考えているということです。逆に言うと、今、細分化というか、細かいことについて詳細に研究されているものを、ある種まとめていく、それを参考にしてまとめていくためにも、こういう大きい枠組みが大事なのではないかと。大きくその3点でこのイメージーションという考え方について、概念について、研究をしているということだと思います。

### 【質問者2】

ありがとうございます。お話を聞いてこう、心理学の大きな核心に繋がるんじゃないかなと思ったのと、ヴィゴツキーがビューラーから経て、心理学の危機というふうに言ってたんですけども、それをこう、解決できそうな気がしました。ありがとうございました。

### 【司会・木戸先生】

では、タニア先生、ありがとうございました。小松先生もありがとうございました。この会はこれでコメントとか、もしかしたら感想とか直接タニア先生に言いたい方がいらっしゃるかもしれませんが、この会はこれで終わりとして、先生おそらくまだ少し会場にいらっしゃいますので、直接お話になりたい人はどうぞ、いらしてください。委員長の方から少しお話がありますので、お願いします。

### 【武藤委員長】

司会の木戸先生もありがとうございました。参加者の皆様、定刻となりましたので、まだご質問をたくさんしたいという方は残っていただければと思います。

## ライフコースにおけるイマジネーション: 社会文化的心理学の視点から

Tania Zittoun  
Open Lecture of the Japan Society of  
Developmental Psychology  
Osaka, November 2, 2019

INSTITUT DE PSYCHOLOGIE  
ET EDUCATION  

1

## イマジネーション

イマジネーション: 「直接的設定(setting)」を抜け出して、過去や未来、現在において可能なことや不可能なことさえも探索することを可能にする経験を作り出すプロセス」  
(Zittoun & Gillespie, 2016, p. 2).

Zittoun, T., & Gillespie, A. (2016). *Imagination in human and cultural development*. London: Routledge.

2



Alex Gillespie  
ロンドン・スクール・オブ・  
エコノミクス、英国

Hana Hawlina, Oliver Pedersen,  
Martina Cabra  
ヌーシャテル大学、スイス



3

## 概要

- I. イントロダクション
- II. イマジネーションと発達
- III. インプリケーション

4

1. イマジネーションの社会文化心理学
2. イマジネーション

## I. イントロダクション

5

## 1. 発達の社会文化心理学

- ライフコースは歴史の中に位置づく
- プロセス、そしてダイナミクスとしての発達
- 発達は相互作用的現象
- Intra-Inter-Trans

Dewey, J. (1934). *Art as Experience*. New York: Penguin.  
Valsiner, J., Molenaar, P. C. M., Lyra, M. C. D. P., & Chaudhary, N. (2009). *Dynamic process methodology in the social and developmental sciences*. New York: Springer Verlag.

6

## 1. 発達の社会文化心理学

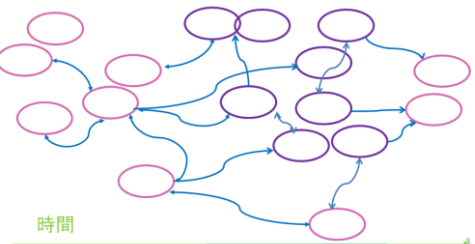
3つの研究の流れから考える:

- ヴィゴツキー: 人は、自身の社会文化的世界を通じて発達する
- 発達に関する社会心理学: 人は、他者との社会的インタラクションを通じて発達する
- 精神分析: 人は、独自の視点を持っている

Valsiner, J. (2014). *An invitation to cultural psychology*. London: Sage.  
Zavershneva, E., & van der Veer, R. (2018). *Vygotsky's notebooks. A selection*. Singapore: Springer.  
Psaltis, C., Gillespie, A., & Perret-Clermont, A.-N. (2015). *Social Relations in Human and Societal Development*. New York: Palgrave Macmillan.  
Winnicott, D. W. (2001). *Playing and reality*. Philadelphia/Sussex: Routledge.

7

## 1. 発達の社会文化心理学




時間

8

### 経験の領分 (sphere)


経験の領分とは  
 …何かしらの社会的(物質的&象徴的)設定において、繰り返し起こる経験、活動、表象、感情の形態・ゲシュタルト (configuration)



Zittoun, T., & Gillespie, A. (2016). *Imagination in human and cultural development*. London: Routledge.

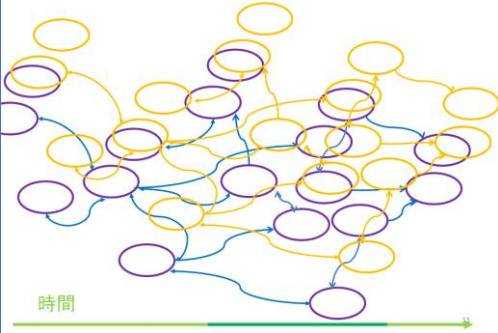
9

### 遠隔的な経験の領野



近接する経験の領野

10



時間

11

### 発達

- 発達は次の場で起きる:
  - それぞれの経験の領野の中で(例: 学習)
  - 領野間を交差して(例: 移転)
  - 経験の領野の再構成が起こる時に
- 発達は連続性と統合を必要とする
- 発達は領野内部や領野間でのつながりを必要とする

Zittoun, T., Valsiner, J., Vedeler, D., Salgado, J., Gonçalves, M., & Ferring, D. (2013). *Human development in the lifecourse: Melodies of living*. Cambridge: Cambridge University Press.

Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. Selected papers.

Zittoun, T., & Gillespie, A. (2015). Integrating experiences: Body and mind moving between contexts. In B. Wagoner, N. Chaudhary, & P. Hviid (Eds.), *Integrating experiences: Body and mind moving between contexts* (pp. 3-49). Charlotte, NC: Information Age Publishing.

12

### 2. イマジネーション

古典的には:

- 「例えば三角形について思い浮かべる時、私はただそれが3本の線によって形作られる図形であるということを理解しているのではない。その時私はそれが今自分の目の前にあるかのようにその3本の線を心の目で見ている。これが私が想像と呼ぶものである。」(デカルト, 1641, p. 45)

Descartes, R. (1641). *Meditations on first philosophy*. In J. Cottingham, R. Stoothoff, & M. Douglas (Trans.), *The Philosophical Writings of Descartes* (Vol. 2, pp. 1-50). Cambridge: Cambridge University Press.

13

### 2. イマジネーション

社会文化的:

- 「イマジネーションの中で何かを思い描く時、例えばそれは、社会主義下における人類の未来の生活であったり、遠い過去の生活や先史時代の人類の困難であったりするが、そのような時私は、自分の実際の経験に基づく感覚を再現する以上のことを行っている。(中略) その遠い過去や未来を実際に自分で見たわけでは決してないのだが、それでもその生活がどのようなものであるかについて自分自身の考えやイメージを持ち、場面を思い描くことができる。」(ワイコツキー, 1930/2004, p. 9).

Vygotsky, L. S. (2004). Imagination and creativity in childhood (M. E. Sharpe, Trans.). *Journal of Russian and East European Psychology*, 42(1), 7-97.

14

### 2. イマジネーション

「私たちは、イマジネーションとは、(因果性や時間的直線性に投入されている)近接的な経験の“今ここ”から自由になり、(因果性や時間的直線性に投入されないことのない)代替的で遠隔的な経験を探索したり没入したりすることであると考える。

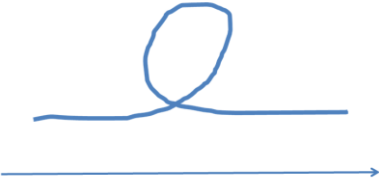
すなわちイマジネーションというイベントは経験(からの)分離によって始まり、大抵の場合、(経験への)再結合という結末になる。

つまりイマジネーションとはループである。」(Zittoun & Gillespie, 2016, p. 40).

Zittoun, T., & Gillespie, A. (2016). *Imagination in human and cultural development*. London: Routledge.

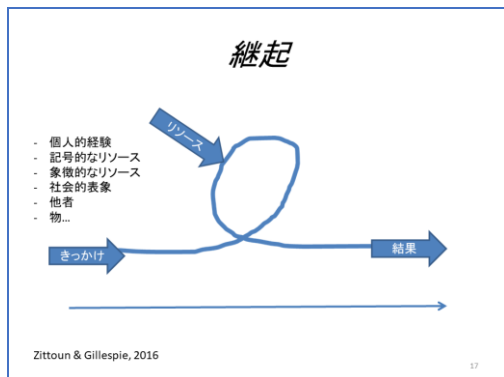
15

### ループとしてのイマジネーション

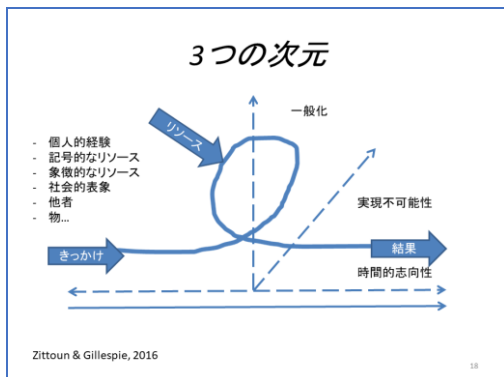


物理的な時間

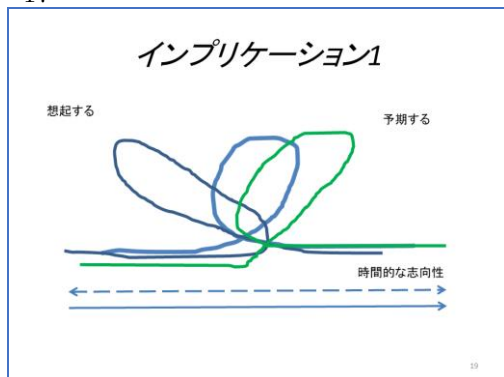
16



17



18



19

### インプリケーション2

- ・ イマジネーションはライフコースを通じて発達する
- ・ イマジネーションの発達はいこれらの次元に沿って起こる

20

3. イマジネーションの発達  
4. 発達におけるイマジネーションの役割

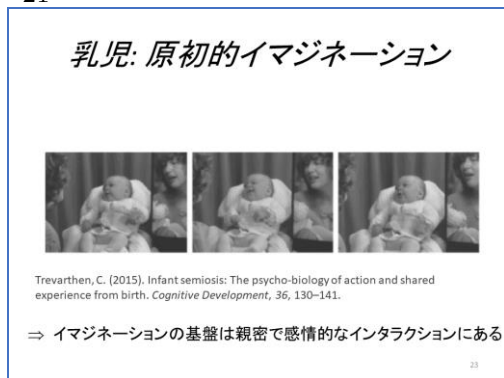
## II. イマジネーションと発達

21

### 3. イマジネーションの発達

- ・ イマジネーションは、とても早い時期から現れる私たちの経験の中の基礎的な側面
- ・ 成熟するにつれて発達する
- ・ それに加えて: イマジネーションは社会文化的ダイナミクスを通じて発達する

22



23

### 乳児: ふざける／おどける

「4ヶ月になると赤ちゃんはお母さんの髪の毛をつかんでお母さんが笑いながら逃れようとしている時に喜んできゃっきやと声をあげるようなことがある。5ヶ月になると、お父さんがフーフと息をだすのを真似するかもしれない。6か月になると、お兄ちゃんやお姉ちゃんが一生懸命作った積み木のタワーを何度も倒したりする。9か月になると、自分の汗臭い足を空中でばたばたさせてお母さんにその臭いをかがせようしたり、シャツをまくっておへそを出したりする。これらの行動はすべて、周りの人々からの反応を引き出すもので、そういったおもしろさの目的でやっているのであればそれはおふざけということになる。」(Reddy & Mireault, 2015, p. R21).

Reddy, V., & Mireault, G. (2015). Teasing and clowning in infancy. *Current Biology*, 25(1), R20–R23.

24

### 乳児: ふざける／おどける



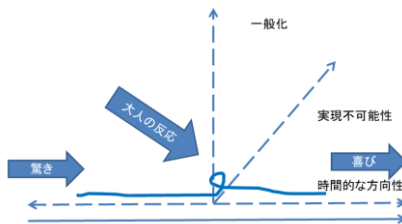
おふざけの例: 周りの人たちが笑うのに応じて、  
極端な表情(いびきをかいているいおばあ  
ちゃん(真似))が繰り返される

Reddy, V., & Mireault, G. (2015). Teasing and clowning in infancy. *Current Biology*, 25(1), R20-R23. <https://doi.org/10.1016/j.cub.2014.09.021>

⇒ イマジネーションの基盤は 互いの楽しさの中にある 25

25

### 乳児におけるイマジネーション



Zittoun & Gillespie, 2016

26

### 幼児: 遊び

幼稚園での自由遊びの時間のことです。4歳のニノ、ミン、ルーク、カーラが、プレイモービルと小さいプラスチック製の動物で遊んでいました。(中略)ニノはミンに「ほら、これは君の騎士(knight)」と言ってプレイモービルを渡します。ミンはその騎士を取って馬車に載せました。カーラが「じゃあこれがお城で、これは女王様とお姫様ね」と言いました。私(マルティナ)は誰も使っていなかったプレイモービルを床から取り、「これは誰? 女性騎士(knightess)?」と聞きました。ミンは不満そうに頭を横に振り、ニノは「knightessじゃないよ」と言いました。そこで私は「でも盾を持ってるとでしょ」と返したのですが、ミンが「これは盾を持った女王様で彼女は闘うの。でもそれはknightでknightessじゃない。knightessとかない。」と説明してくれました。(Cabra, 2019)



注釈:  
プレイモービル

27

### 幼児: 遊び

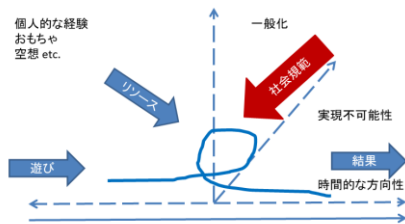
4歳のルーシーがお部屋で魔法の杖で遊んでいま  
す。彼女は私に魔法をかけてと言いました。私は  
「きやー、カエルにされてしまうー!」と叫びました。  
するとルーシーは「違うよ、あなたは女の子なんだ  
からカエルにはなれない。女の子はお姫様になる  
の。」と言いました。

Cabra, M. (In preparation). *Gender differentiation in children's actions: A sociocultural perspective on the transition from kindergarten to primary school* (PhD Dissertation). Neuchâtel.

⇒ 社会文化的規範: 何でもイマジネーションが可能  
なわけではない

28

### 遊びにおけるイマジネーション



Zittoun & Gillespie, 2016

29

### 幼児: 時間を構成する

母: さいとうたくちゃんは[みんなの友達](うん)、発表会  
でなにやんの? (1秒)

ミ: こうもり(2秒) みなちゃんはうさぎ。

母: うさぎさんのでげきにでくんの? こうもりが?  
(1秒) べつなの?

ミ: こうもりおわつたら、(うん)んと、そしたらうさぎに  
なるかもしれないこうさぎちゃんに

母: こうさぎ みみちゃんじゃなかったな ゆきうさぎ!  
ミ: みな ゆきうさぎだよ

Komatsu, K. (2019). *Meaning-making for living. The emergence of the presentational self in children's everyday dialogues* (p.7). Cham (Switzerland): Springer.

30

### 学校における思春期の子ども達

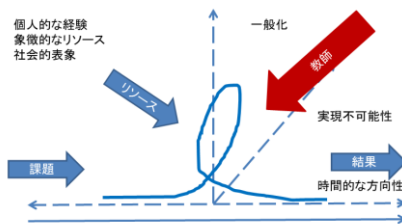
- 哲学の先生は芸術に関するディスカッションがしたい:  
芸術は美に関するもの?
- 生徒が答えようとする。「芸術は政治に関するものでもあり得るし、広告の中にもあったり、ストリートアートの中にも。」
- 先生が却下する: 古典的な詩の中にあるように、芸術は「醜い」ものに関するものでもあり得る

Zittoun, T., & Grassen, M. (2012). Cultural elements as means of constructing the continuity of the self across various spheres of experience. In M. César & B. Ligorio (Eds.), *The interplays between dialogical learning and dialogical self* (pp. 99-126). Charlotte, NC: Information Age Publishing.

- 先生が生徒のイマジネーションを無効にした: イマジネーションやディスカッションの「間違った」やり方

31

### 思春期におけるイマジネーション



Zittoun & Gillespie, 2016

32

### 成人



福島のSさん:「私の故郷のことを思い出させる。」(Sato)

33

33

### 成人

- 避難後に、Sさんは災害と関連づけられた白服の人たちという現実のことではなく、丘のことを想像(イマジネーション)した。
- のちに、骨壺を手に、墓地はかつて丘の上にあったのだけど、災害のあとお墓にお参りに行くことは不可能だった。今彼女は骨壺を取り戻し、新しいお墓も作られることになっている。

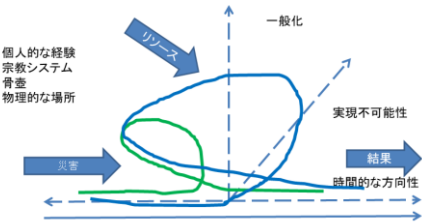
⇒過去のことや未来のことのイマジネーションが再び可能になる  
⇒社会的、物質的、情動的条件

Zittoun, T., & Sato, T. (2018). Imagination in adults and the aging person: Possible futures and actual past. In T. Zittoun & V. P. Glăveanu (Eds.), *Handbook of culture and imagination* (pp. 187–208). Oxford: Oxford University Press.

34

34

### 成人におけるイマジネーション



Zittoun & Gillespie, 2016

35

35

### 統合的理解 I

- イマジネーションは高次な精神的機能として発達する
- しかし社会文化的ダイナミクスはイマジネーションの発達を促進することもあれば阻害することもある:
  - 関係性の質
  - それぞれの関わり方についての認識
  - 物質的リソースや象徴的リソースへのアクセス
  - イマジネーションのためのスペース
  - その結果の認識

36

36

### 4. 発達におけるイマジネーションの役割

- 人の発達におけるイマジネーションの役割とは?
- イマジネーションの役割は、発達に備え寄り添うための鍵となる

37

37

### 遊びと発達

子ども達の遊びにおけるイマジネーションには発達の機能がある:

- 社会的に複雑な状況のトレーニング、感情を洗練させる;
- 社会化や認知・運動スキルの発達における役割
- 自ら作り出した発達の最近接領域, etc.

Gillespie, A. (2006). Games and the development of perspective taking. *Human Development*, 49(2), 87–92.  
Hvid, P., & Villadsen, J. W. (2018). Playing and Being – imagination in the life course. In T. Zittoun & V. P. Glăveanu (Eds.), *Handbook of culture and imagination* (pp. 137–166). Oxford: Oxford University Press.  
Singer, D. G., & Singer, J. L. (1992). *The house of make-believe: Children's play and the developing imagination*. Cambridge, MA: Harvard University Press.  
Vygotsky, L. S. (1933). Play and its role in the mental developmental of the child. marxist.org

38

38

### 若い人たちにおけるイマジネーション

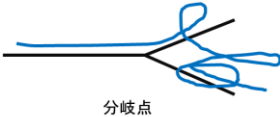
- 将来への志向におけるイマジネーション(職業選択、目標、etc.); Akkerman, S. (2018). Imagination in and beyond education. In T. Zittoun & V. P. Glăveanu (Eds.), *Handbook of imagination & culture* (pp. 211–221). Oxford: Oxford University Press.
- イマジネーションと遊び心、スキル; Johnson, S. (2005). *Everything bad is good for you. How today's popular culture is actually making us smarter*. New York: Riverhead books.
- TEM:分岐点において可能性を探索するためのイマジネーション; Sato, T. (2017). *Collected papers on trajectory equifinality approach*. Japan: Chitose Press.
- イマジネーションの中の「実現しなかった」可能性も、私たちの経験の領分の一部であり続ける

Phillips, A. (2013). *Missing out: In praise of the unlive life*. London: Penguin Books.  
Zittoun, T. (2015). Transitions, imagination and TEM. In Y. Yasuda, A. Nameda, M. Fukuda, & T. Sato (Eds.), *Wordmap TEA Theory edited* (pp. 97–100). Kyoto: shin-yo-sha.

39

39

### イマジネーション



分岐点

After Zittoun, T. (2015). Transitions, imagination and TEM. In Y. Yasuda, A. Nameda, M. Fukuda, & T. Sato (Eds.), *Wordmap TEA Theory edited* (pp. 97–100). Kyoto: shin-yo-sha.

40

40

## 成人の生活におけるイマジネーション

- 日々の活動の中で(仕事, レジャー, etc.)。特に移行において:

- 世代的役割における変化: 親になる

Zittoun, T. (2004b). Symbolic competencies for developmental transitions: The case of the choice of first names. *Culture & Psychology*, 10(2), 131-161

- 空間的变化: モビリティと「地理的イマジネーション」

Salazar, N. B. (2011). The power of imagination in transnational mobilities. *Identities*, 18(6), 576-598.

Zittoun, T. (In press). Imagination in people and societies on the move: A sociocultural psychology perspective. *Culture & Psychology*.

41

41

## 成人の生活におけるイマジネーション

辺鄙なフェロー諸島(注釈: アイスランドとノルウェーの間の小さな島)に住む25歳の移住についてのイマジネーション:

- 「移住する心づもりはそれなりにできてるかな。それで家族だとか、ほら、そういう類のことを考えるんだ。(中略)家族というのは自分にはすごく重要だ。だから今は狭い世界にはいたくないと思う。そしたら出会いの機会もあるだろうし... ここだと(パートナーとなるべき人との)出会いがないんだ。」(エイダン)

Pedersen, O. (2019). Transformative and non-transformative encounters with unfamiliar (im)mobilities a case study in the Faroe Islands. Paper at ISTP, Copenhagen.

42

42

## 老人の生活におけるイマジネーション

- 老年期は過去のイマジネーションだけでなく、同時に好奇心や、また可能な未来についてのイマジネーションともかかわる。—それはとても重要なものだ。

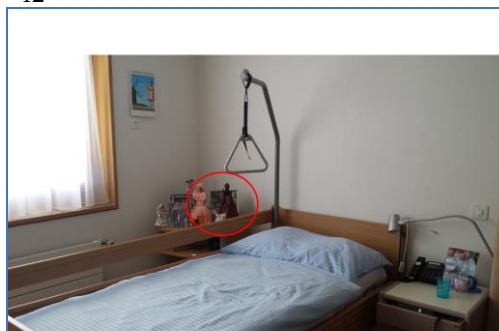
Sakaki, M., Yagi, A., & Murayama, K. (2018). Curiosity in old age: A possible key to achieving adaptive aging. *Neuroscience & Biobehavioral Reviews*, 88, 106-116.

Smith, J., & Freund, A. M. (2002). The dynamics of possible selves in old age. *The Journals of Gerontology: Series B*, 57(6), P492-P500.

Zittoun, T. (Subm.). Old age. In V. P. Gläveanu (Ed.), *Encyclopedia of the possible*. London: Palgrave.

43

43



クララの部屋

44

44

## 老人の生活におけるイマジネーション

- イザベル: 「これは全部私の家族の写真(中略)これを見て家族のことを思うの。いい思い出があるわ。みんな何してるだろうか。みんな元気で良い人生を送ってほしい。私もこの写真の中で生きているの。」
- クララと黒いマリア様の像(聖地ルルド巡礼の旅の思い出): 「死ぬ前にもう一度行きたいわ。今年は行けなかったけれど来年こそ。」

Zittoun, T., Grossen, M., & Salamin Tarrago, F. (In press). Creativity, imagination and self-continuity in the transition into a nursing home. *Learning, Culture and Social Interaction*

45

45

## 統合的理解II

- イマジネーションは人生の最初から最後まで人の発達において重要な役割を果たす

46

46

5. イマジネーションはなぜ重要?

6. 結論として: イマジネーションを促進する

### III. インプリケーション

47

47

## 5. イマジネーションはなぜ重要?

- 発達におけるイマジネーションには常に結果がある: 喜び、解決、創造..
- イマジネーションは共有され得る(人と一緒にイマジネーションする): 例) 科学のクラス

Hilppö, J. A., Rajala, A., Zittoun, T., Kumpulainen, K., & Lippinen, L. (2016). Interactive dynamics of imagination in a science classroom. *Frontline Learning Research*, 4(4), 20-29.

- イマジネーションの結果は共有され得る(そしてイマジネーションのリソースとなる): 例) 月への旅行

Zittoun, T., & Gillespie, A. (2018). Imagining the collective future: A sociocultural perspective. In C. de Saint-Laurent, S. Obradovic, & K. Carrière (Eds.), *Imagining collective futures: Perspectives from social, cultural and political psychology* (pp. 15-37). London: Palgrave.

- 集会的イマジネーションは社会を変化させ得る

48

48



## イマジネーションと社会変化

Neue  
Slowenische  
Kunst (NSK)  
によるポスター  
スキャンダル  
ユーゴスラビア  
1987, 政治  
体制の変化の  
始まり



Hawlina, H. (In prep.). *Collective imagination and sociogenesis through the prism of imagining collective futures* (PhD Dissertation). Neuchâtel, Neuchâtel.

49

49

## 6. 結論: イマジネーションを促すために

イマジネーションは認知的なキャパシティや年齢にのみ依存しているわけではない。イマジネーションは以下のものにも依存している:

- 1) 子どもと大人のインタラクションのクオリティー;
- 2) 幅広い多様性をもったリソースへのアクセス;
- 3) イマジネーションのためのスペース(制約がない)
- 4) 3つの次元でのサポート(時間、実現可能性、距離)
- 5) 尊重され、社会的に正当とされること

イマジネーションとは不安定で壊れやすく、そしてきわめて重要なもの!

50

50

イマジネーションとは基礎的な社会文化的プロセスであり、人の発達において中心的な役割を果たす

[tania.zittoun@unine.ch](mailto:tania.zittoun@unine.ch)

ありがとうございました!

翻訳: 島山理恵(東京大学)  
監修: 小松孝至(大阪教育大学)  
木戸彩恵(関西大学)  
サトウタツヤ(立命館大学)

51

51